前進

社会と子どもつなぐ窓口 いわき

キッズドア 避難者向け学習会

吉川さん（右）を取材するスタッフ

特定非営利活動法人キッズドアは、東京や東北地方などで子どもの学習や食事の支援を行っている。「子どもと社会の窓口」というキャッチコピーのもと、職員20人のほか、２０００人を超えるボランティアらが支えている。福島県内では、いわき市内などに避難している楢葉町・双葉町の子どもを対象に学習支援を行っている。他にも、市内の中高生を対象に講座も開いている。

２つの町の子ども向けの学習会は、すべての子どもたちに学習環境を提供することを目的としている。この学習会で講師を勤めているのは、元大学講師や大学生たち。彼らはシフトを組み、子どもに教えている。

これらの活動の成果が出てきているという。福島県復興支援担当の吉川凛さん（23）は、「通っている生徒はみんな『皆勤賞』。学力向上により、自分に自信がつき、さまざまなことに目を向けるようになった」と話す。

（鈴木康平・佐藤玄佳）

福島担当の吉川さんに聞く 学ぶ楽しさ感じて

特定非営利活動法人キッズドアの福島県復興支援担当吉川凛さん（23）にきいた。

―活動を始めたきっかけは。

「東日本大震災です。楢葉に生まれ、東京の大学に通い就職も決まっていましたが、子どもたちのためにキッズドアに入り故郷に戻ってきました」

―心がけていることは。

「子どもたちが活躍できる社会に変革していきたい。生きていることは良いことだと思える社会をつくりたい」

―たいへんなことは。

「子どもたちに自信を持たせることです。さらに、他人と関わり合い、気持ちを理解し、考え合うことの大切さを教えることです」

―これからの活動は。

「今、学習会で心がけていることは、好きな教科をたくさん勉強し学ぶ楽しさを知り、苦手な教科も勉強するようになること。学習をさらに楽しく感じてほしい。この取り組みで、教育の概念を変えて、勉強がつらいという考え方を変えたいです」

（佐藤聖人）

笑顔あふれる仮設商店街

いわき久之浜

食料品店経営 遠藤さん「町の人のために」

いわき市久之浜町の久之浜一小の校庭に浜風商店街がある。３年前の東日本大震災の津波やそれによる火災により被災した商店などが入った仮設店舗だ。その中に「ブイチェーンはたや」はある。

震災前、ブイチェーンはたやは、食料品を販売していた。しかし津波により、店は壊れ、当時使用していた機械が使えなくなってしまった。店長の遠藤利勝さん（50）は「思い出がある器具ばかり。とてもつらい」と話す。

商店街について説明する遠藤さん

しかし、いわき市などの勧めもあり、遠藤さんをはじめとした複数の久之浜の商店が立ち上がり、「浜風商店街」を設立した。商店街を利用する人は車を運転できない地元のお年寄りが多い。店舗の新たな出発に涙を見せるお客さんもいたという。とても地域に密着していると言える。

だが、仮設店舗での営業は困難の連続だった。「夏になると店舗の中はとても暑い」と遠藤さんは話す。その他にも客足が減ったことや、商品の品揃えが少なくなったことを挙げていた。遠藤さんは、「地元の人がよく使うものを揃えているが、お客さんのほしい商品がないときに、せっかく来てくれたお客さんに商品がないことを伝えるのが悔しい」と話す。

しかし、いつまでも暗いことは言っていられない。遠藤さんは「この商店街は笑顔が有名なんですよ」と話す。これまでも、そしてこれからも笑顔の浜風商店街は地域に愛され続ける。（沖野峻也・鈴木真喜子）

ブイチェーンはたやの店内

浜風商店街

伝えていくことが大切

商店街の佐藤さん 震災の写真紹介

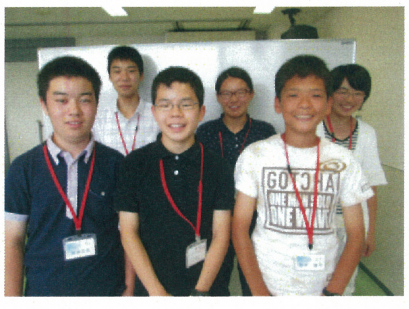
津波の写真について説明する佐藤さん（左）

浜風商店街には震災での津波の恐ろしさを伝える部屋がある。震災後すぐの家屋などの写真が壁一面にたくさんあった。商店街で電気店を営む佐藤テルイさん(73)が、当時の様子を教えてくれた。

テルイさんは震度６強の地震が６分間も続いたこと、町が火事になったこと、３日も経ったら帰れると思っていたがすぐには戻れなかったこと・・・。津波の被害の大きさも写真を指さしながら説明してくれた。

テルイさんは震災の記憶が徐々に薄れていくのが心配だという。「あなたたち若い人が震災のことを伝えていってほしい」と願っている。

（鈴木莉奈子）



私たちが編集しました

沖野　峻也（福島大附属中）
佐藤　聖人（平三中）
佐藤　玄佳（泉中）
鈴木　康平（中央台南中）
鈴木真喜子（藤間中）
鈴木莉奈子（平一中）